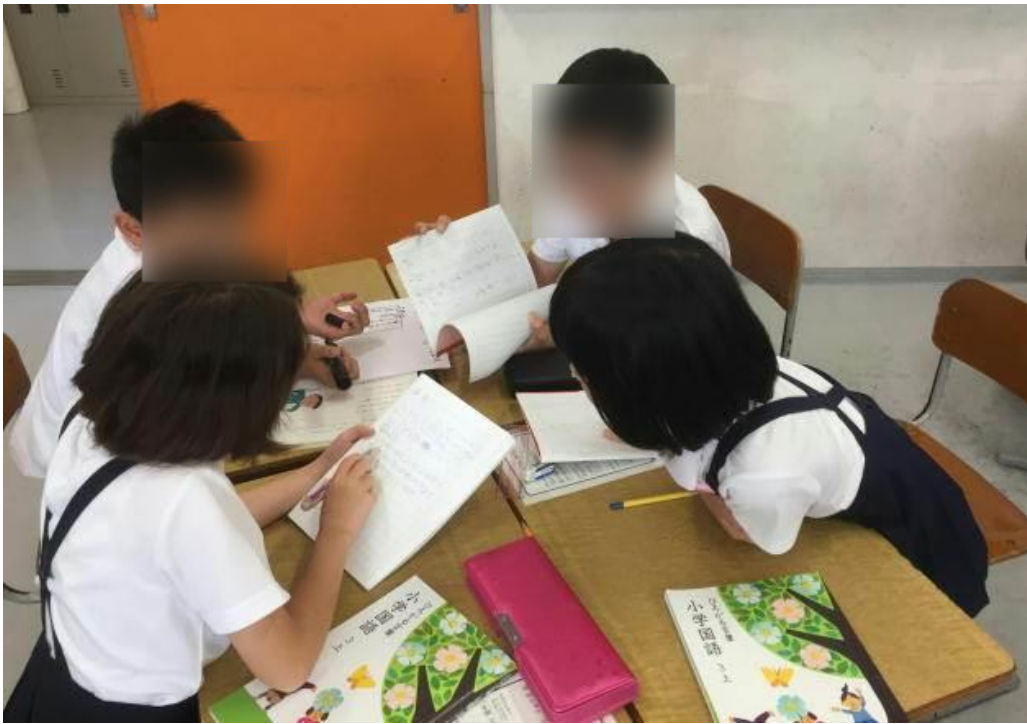


「主体的・対話的で深い学び」を保障する授業の具現化

平成30年度 国語科のまとめ②



- 研究大会実践の解説

3年「モチモチの木～読書でたいわ！～」

- 研究大会の成果・課題を踏まえた実践

3年「話し上手・聞き上手修行！

『トークでハッピーフレンズ！』

実践者 澤田仁志

平成 30 年度 附属函館小学校研究について

平成 30 年度 北海道教育大学附属函館小学校 研究テーマ

「主体的・対話的で深い学び」を保障する授業の具現化
～「学びの文脈」に基づいた各教科等の単元のデザイン～

* 課題設定の理由と研究の経緯 については、「研究のまとめ」を参照して下さい。

1. 「単元のデザイン」とは

単元のデザイン

単元の目標を達成する（≡「資質・能力」の育成を目指す）ために…

- ① 単元の目標を分析し、目指す子供の姿に至るまでの**単元の構想**をする。
- ② ①を子供の**問題解決のストーリー**の視点で**整理**する。
- ③ 学びの文脈を生み出したり、つないだりする**支援**を**具体化**する。

まず前提として、授業づくりを行う時に重視しなくてはいけないのが、主体的・対話的で深い学びを通して、単元の目標を確実に達成することです。そのための、「単元のデザイン」は、本校では3つのステップにより行われています。

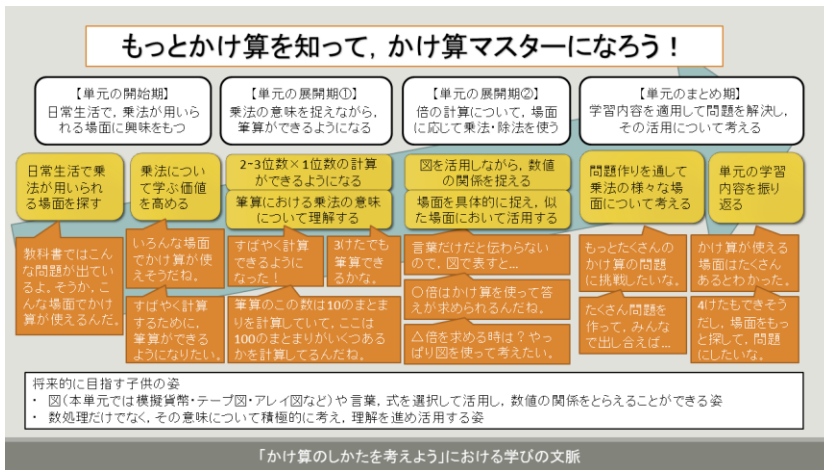
最初は、単元の目標を分析し、目指す子供の姿に至るまでの単元の構想をします。学習指導要領の内容を確認したり、各教科書会社の教科書を比較したりすることなどを通して、どのような学びを展開すれば、単元の目標が達成できるのかを考えます。その時、単元の終了時における目指す子供の姿から逆算し、どのような過程を経てその姿になるかを構想することも重要です。このようにして、単元の構想をすることが、第1のステップです。

次は、その学習活動の流れを、子供の問題解決のストーリーの視点で、整理します。先述の通り、主体的・対話的で深い学びを通して、資質・能力を獲得・育成していくには、子供が学びたいと思える「問題解決のストーリー」が重要になります。子供の実態を捉え、単元における問題（課題）を解決することに、必要感や必然性を感じるような単元になるよう整理することが、第2のステップです。

最後に、「学びの文脈」を生み出したり、つないだりするための教師の支援や手立てを具体化します。「学びの文脈」を通して、子供が主体的・対話的で深い学びをしていくには、適切な教師の関わりが重要です。それは時に直接的な関わり（対話や発問など）であったり、間接的な関わり（場の設定や環境整備など）であったりします。また、各教科等の特質や単元のもつ特性、児童の実態などにより、その手立ては多様になり得ると考えています。その手立てについて考え、単元の中で適切な支援ができるよう具体化していくことが、第3のステップです。

2. 単元における資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

- ① 教科等の枠組みを踏まえながら、社会の中で活用できる資質・能力（国語力・数学力など）
 - ② 教科等を越えた全ての学習の基盤として生まれ活用される資質・能力（言語能力・情報活用能力など）
 - ③ 現代的な諸課題に対応できるようになるために必要な資質・能力（安全で安心な社会づくりのために必要な力など）
- 中央教育審議会答申（中教審 197号）、p27



これまでの研究で、資質・能力の育成のために「学びの文脈」が重要であることはわかってきました。そして育成を目指す資質・能力については上の3つがあるとされています。

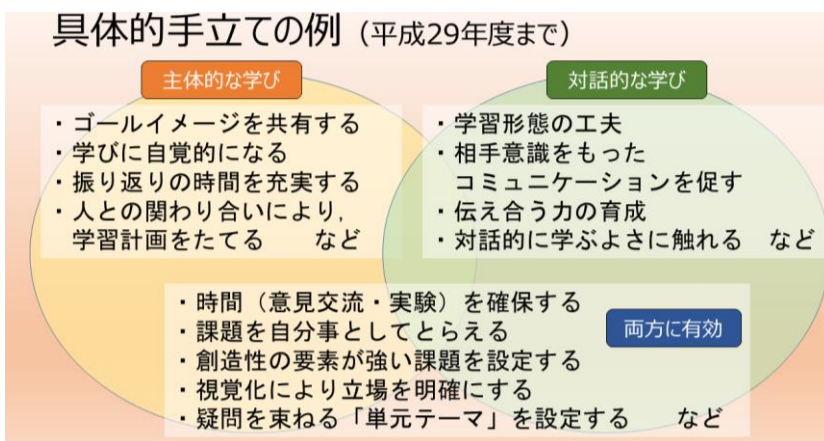
これまで本校では、「学びの文脈」は①の資質・能力の育成に資するものと考えてきました。

今年度は、本校において育成を目指す資質・能力の軸を①としながら、その単元で育成を目指す資質・能力

が②や③の資質・能力の育成にどのようにかわり、「学びの文脈」上でどのように表されるかを追究しています。

具体的には、単元の学習終了時や、その教科等を学び進めた時、あるいは将来的な（各教科等の目標に沿った）子供の姿として授業者がイメージし、それに向かう姿が見られようにすることに挑戦しています。そのために、指導案上で「学びの文脈」を図化することで、①の資質・能力の育成はもちろん、②や③の資質・能力とのつながりを捉えることができることを期待しています。

3. 「学びの文脈」を生み、つなげる具体的手立て



今回の研究では、これまでに行われてきた授業づくりにおける具体的な手立てを、各教科等の資質・能力の育成という視点からもう一度見直し、単元の学びをどのようにつないでいるのかを示すことに挑戦しています。これにより、授業にどんな学習活動を盛り込むことで「学びの文脈」を生み、資質・能力を育成することができるかを、より明確に見出すことができると考えました。

「学びの文脈」を”生み出す”ための手立ての多くは、単元や題材を選びません。また、教科等も限定されない（汎用性が高い）ことも多いです。例えば、「気付きを生む資料と出会う」ことや、気付きから「単元テーマ」を設定するなどの手立てです。その多くは教科横断的に活用できると言えます。

そして「学びの文脈」を”つなぐ”ための手立ては、各教科等の特質に応じて行われる（「見方・考え方」を鍛える）学びの場面で多く見られます。例えば、「教師との対話により目標に迫る」「既習との関連を明確にして統合的・発展的に学ぶ」などです。その多くは、より「深い学び」を実現する手立てとして、活用できると言えます。

国語科 研究大会実践の解説

単元名 3年「モチモチの木～読書でたいわ！～」

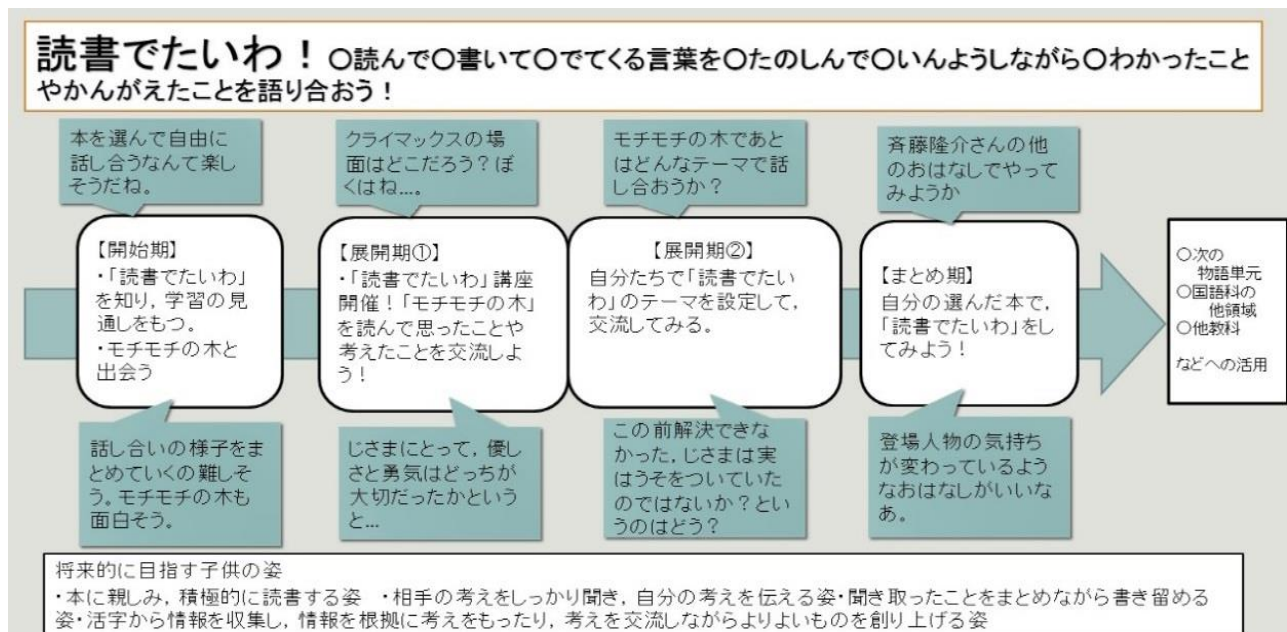
(1) 単元における、資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

本単元では、子供たちに、

- 登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えることができる。
- 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像することができる。
- 文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くことができる。

という資質・能力を身に付けさせることができるよう、「学びの文脈」を次の通り構想しました。

<p>ア 「読書でたいわ」を知り、学習の見通しをもつ。 イ 「モチモチの木」と出会う。</p>	<p>開始期</p>
<p>ウ 「読書でたいわ」講座を開催し、「モチモチの木」を読んで、思ったことや考えたことを交流する。 エ 自分たちで「読書でたいわ」のテーマを設定して、交流する。</p>	<p>展開期</p>
<p>オ 自分の選んだ本で、「読書でたいわ」を行う。</p>	<p>まとめ期</p>



図：単元デザイン

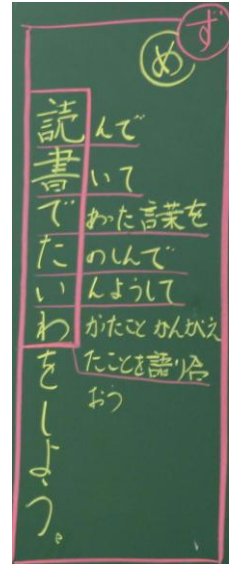
(2)「学びの文脈」を生み、つなげる具体的手立て

学びの文脈を生み、つなげることができるよう、下記のような3つの手立てを行いました。

手立て① 子供が意欲的に課題を解決できるような、課題の提示や発問の工夫をする

子どもが主体的に課題解決をしていくことができるように、子供が、学習する見通しを明確にして、単元を通して学習していく言語活動に向かうための「一単位時間の言語活動」「段階的な言語活動」を工夫しました。例えば次のようなことです。

- ☆ 「ずっとめあて」（単元通して）「きっと今日めあて」（その時間で達成する）の設定
- ☆ 叙述を引用しながら、交流したことを見える化する言語活動（たいわシート）
- ☆ 各グループの中で解決できなかった課題、盛り上がったテーマを抽出し、そのテーマを使って全体交流会の実施
- ☆ 3次に向かうための「読書でたいわ教室」の開催
- ☆ 自ら課題を解決できるような「読みの視点」の提示



特に「読みの視点の提示」においては、教師からの疑問、意図的な補足などの発問の工夫により、自分達の読みの再検討、再構成を進めていくことができるようにしました。基本的には、子供たち自身の言葉を多くしながら、グループでも全体でも交流を行います。教師が、話合いに視点を与えたり、方向付けをすることで、話合いが活性化していきました。

手立て② 考えを共有したり、感じ方の違いに気付いたりするための交流の場の工夫

作品を読んで考えたことを交流し、考えを共有したり、感じ方の違いに気付いたりするためには、対話的な学びは不可欠です。特に読むことの授業においては、発問や課題の解決の過程で多くの仲間の意見を聞きながら、読み取っていくことが大事になります。

そこで、小グループで読書会を行いながら、話し合いを「たいわシート」（引用とそれに対する考えを書き込むシンプルな用紙）に見える化していく活動を取り入れました。さらに小グループでの学びや考えの広がりや深まりを、全体にひろげていくために、「たいわシート」を交流し、全体で一つのテーマに向かって話し合う活動（全体での読書会）を取り入れました。小グループ同士の交流の際の、形態についても様々な形態で学ぶことができるようにしました。（ワールドカフェ、フィッシュボウルなど）



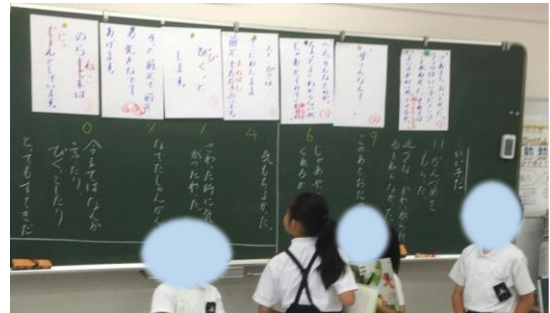
手立て③ 全員が楽しく「読める・わかる」単元（授業）デザインの工夫（ユニバーサルデザイン）

国語科の読むことにおいて、全員が「読める！」「わかる！」を実感することが大切です。そのためには、学び方（読むことであれば「読み方」）を知識としてもっている必要があります。「ごんの心情を読み取ってごらん？」というだけでは、読み取れない子供もいます。そこで、様々な文学表現の特徴から読み取らせるための工夫や、学習の中に教師からのしかけ（手立ての工夫）をすることで、全員が「読み方」を身に付け、読むことの目標に迫ることができると考えました。本実践では、ユニバーサルデザインを取り入れた学習を展開し、子供が「読み方」や資質・能力を身に付けている姿を捉えていくことができました。

- ☆ 挿絵を並べ替えながら、物語の流れをつかむ学習
- ☆ 例えば、豆太が臆病だと思ふ文を見つけたら、教師が判読をしているときに手を叩く読み方
- ☆ 例えば、昼と夜の豆太を比較するために、二色のペンで線を引きながら読む読み方
- ☆ その場面における「間違っただ豆太像」の提示により、人物像に迫る読み方
- ☆ 教科書の言葉を引用した「センテンスカード」の活用（並べ替え、間違い探し、選択や消去法）
- ☆ 主題読みの際の「主題選択カード」の活用
（自分の主題の捉えと近い意味を見つけたり、異なる読みを消去することができる）

※センテンスカードの活用例

例えば、「作品の主題を考える」という授業をするときに、子供たちの頭の中を整理してくるために、あるいは、全員が手を挙げるができるようにするために行うしかけです。そうすることで、混沌として、「なんだかわからない」となっている子の頭の中を少し整理することができるようになります。言葉が目の前にあることで「う～んどれかな？」と考えることができるようになるということです。



その一時間の授業において、目標に迫る言葉に着目させたり、語句をあえて違う言葉に換えて間違い探しをさせたり、教科書の言葉を隠して提示することでその言葉の意味を考えさせることができます。また、本文にはない登場人物の気持ち（しかも真逆の）を付け加えることで、自然と心情把握に向かわせることもできるので、この提示はとても有効です。

勇気のある子どもと現在の臆病な豆太の対比をより浮き彫りにするための、「隠す」提示です。

山のくま様のお祭りな
んだ。それは、三人の子
どもしか見ることには
きねえ。それもだ
ある子どもだけ

いばって→おどつて
に書き換えること
で、モチモチの木に
対していばっている
豆太の姿をクローズ
アップします。

①夜中は木の下に立
つて、りよう足で足ぶ
みして、おどつてさいそ
くしたりするくせに

昼間→夜中
に書き換えることで、
昼と夜の豆太を対比し
て読むことができますよ
うにします。

豆太の気持ちを付け加えます。
ただし、本当は怖いはずなのに、「わくわく」という言葉に換えてあります。これによって、臆病な豆太の心情に視点が向けられます。
心情を想像するのが苦手な子ども、わくわくという言葉とこの場面の豆太の心情の違和感

②じさまも、おどうも見たん
なら、自分も見たかつたけ
ど、こんな冬の夕方にモチモ
チの木を、それもたつた一人
で見に出るなんて、とんでも
ねえ話でわくわくする。

夜中→夕方
と書き換えます。
それによって、昼間の豆太との対比ができるとともに、いばっていた豆太から臆病な豆太に戻っていく様子を想像するための手助けとなると考えました。

研究大会実践の成果と課題

成果

本年度は、手立てを明確に打ち出し、それをしっかり検証していくことで、今後の自分の授業の広がりを実感することができました。

1. 子供が意欲的に課題を解決できるような、課題の提示や発問の工夫の幅にひろがり

最近「これはどうしてでしょう?」とか「～の気持ちを考えましょう」のように発問をすることをやめています。発問は教師が発話するだけではないのだなと思っています。むしろ、本実践によって、様々な方法で、子供の思考を耕したり、揺さぶったりすることができることがわかりました。課題についても同様で、気持ちを考えようと言うより、クライマックスの一文を見つけるとか、「自分が考える主題に近いのはどれ?」と5択問題にするとか、子供が立場を決めてその根拠に基づいて考えを交流する授業の方が、子供にとっては参加しやすくわかりやすく、さらに思考力・判断力・表現力を育むこともできると考えます。

2. 考えを共有したり、感じ方の違いに気付いたりするための交流の場を見せ合うことの成果

ワールドカフェ形式は、じっとしてられない子が、活動する手段となります。でも目的を持っているので、ちゃんと学んで帰ってきます。フィッシュボウルは、みんなに見られるので、真剣に言葉と向き合います。交流の工夫をすることで、子供は主体的になり、そして、対話的に学びを進めることができました。

3. 全員が楽しく「読める・わかる」単元（授業）デザインの工夫（ユニバーサルデザイン）に手応え

教師が言葉で発問をすることが基本的に不要でした。カードを見せるだけとか、わざと間違った読み方で音読するとか、挿絵の順番を入れ替えるとか、子供に「私たちは教科書しっかり読んでいれば、先生の間違いに気づけるし、先生のしかけにも引っかけられない!」のような意識をもたせることで、必要感をもって、そして何より楽しみながら文章にふれていくことを実感しました。

課題

本単元における「資質・能力」を身に付けた子供の姿について

- 登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えることができる。
- 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わり結び付けて具体的に想像することができる。

⇒ 今回、クライマックスのシーンを決める場面において、子供たちから、「泣き泣き走った」という叙述が二つ出てくることについて、

「最初の泣き泣き走ったは『痛くて寒くて怖くて泣き泣き～』、次の泣き泣きは『じさまが死んじゃう方がもっと怖かったから泣き泣き～』だからね、じさまのためにとって、じさましないで～って泣きながら夜の道をくだった豆太がね、一番勇気を出している場面なの」「今までは夜にトイレにも行けなかった子

が裸足で走ったんだから。」これが、上の二つの目標を達成している姿です。この姿が一人でも多くの子に広がっていくためにも、「誰にでも読める」授業は必須です。これからも開発していきます。

○ 文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くことができる。

○ 読書を通じて自分のものの見方、考え方を深めようとするとともに、考えを伝え合うことで互いの感じ方の違いを認め合おうとしている。

⇒ 「楽しい！」とみんなが思える授業を展開することが必要だと考えます。目をキラキラさせて文章と向き合う子が、増えてきました。そんな姿を研究大会でも見ることができたことは成果だと思います。しかし、読書に親しむだけではなく、自分の人生に本や文章を活用して、豊かな生き方ができるように、文章を読める人、本が好きな人を育てることが、喫緊の課題というか、永遠の課題であると考えていますので、努力をしていきます。

実践提案「聴く→話す 単元デザイン」

3年「話し上手・聞き上手修行！『トークでハッピーフレンズ！』」

(1) 単元における、資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

本単元では、子供たちに、

○ 目的を意識して、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を比較したり分類したりして、伝え合うために必要な事柄を選ぶことができる。

○ 相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考えることができる。

○ 話の中心や話す場面を意識して、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などを工夫することができる。

○ 必要なことを記録したり質問したりしながら聞き、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉え、自分の考えをもつことができる。

という資質・能力を身に付けさせることができるよう、「学びの文脈」を次の通り構想しました。

【話し上手・聞き上手修行！気持ちを伝える話し方、聞き方を考えよう】

開始期

ア 言語活動と出会う。

イ 気持ちを伝える話し方、聞き方について考える。

ウ 話し上手・聞き上手修行！『トークでハッピーフレンズ！』を設定する。

【話し上手・聞き上手修行】

展開期

エ 宝物を紹介する活動を通して、よりよい話し方や聞き方について考えたり、実践したりする。

① 聞き上手修行を行う。 ② 話し上手修行を行う。

【修行の成果！トークでハッピーフレンズをしよう！】

まとめ期

オ 宝物を紹介し合い、質問したり、宝物について感想を伝え合ったりしながら、トークを楽しむ。

話し上手・聞き上手修行！『トークでハッピーフレンズ！』

気持ちを伝える話し方にもいろいろあるね。言葉もいろいろだ。

先生の宝物はペットなんだ。色とか、種類とか聞かないとわからないな。

質問を10個考えたときのことを思い出して話を考えよう。

質問から学習を開始したから、話す順番とかみんなに決めてわかりやすい。

【開始期】
【第1次 話し上手・聞き上手修行！気持ちを伝える話し方、聞き方を考えよう】
○言語活動と出会うとともに、気持ちを伝える話し方、聞き方について考える。

【展開期①】
【第2次 話し上手・聞き上手修行】
○聞き上手修行を行う。質問をするための観点作りを行う。(クローズドクエッション・オープンクエッションなど)

【展開期②】
○「話し上手修行」を行う。
「宝物スピーチの書を作ろう」

【まとめ期】
【第3次 修行の成果！トークでハッピーフレンズをしよう！】
○宝物を紹介し合い、質問したり、宝物について感想を伝え合ったりしながら、トークを楽しむ。

○次の物語単元
○国語科の他領域
○他教科
などへの活用

まずは、聞きたいことを聞けるようになって、話すことも決めやすくなるのか。

答えがいくつもある質問がオープンなんだ。どこがかわいいのか、聞いてみよう。

最初に決まっていることから話し始めて、後半にオープンなことを話して行くことにしよう。

質問をたくさん考えたから、自分が質問をされても答えやすいね。

将来的に目指す子供の姿

・中心点をはっきりさせて話を聞き取り、質問を的確にすることができる。要点をはっきりさせて話すことができる。時と場に応じた話し上手と聞き上手。人を不快にさせない話し手。話し手をいい気分にさせてしまう優れた聞き手。

図：単元デザイン

(2) 「学びの文脈」を生み、つなげる具体的手立て

学びの文脈を生み、つなげることができるよう、下記のような2つの手立てを行いました。

手立て① 子供が主体的・対話的に学ぶ単元構想

本単元は、教科書教材『たからものをしょうかいしよう』『気持ちをつたえる話し方・聞き方』を扱います。

知識・技能教材『気持ちをつたえる話し方・聞き方』は、言葉にはいろいろな意味が込められていることを知ることで、言葉による気持ちを表す表現の豊かさに気付き、気持ちが伝わる話し方や聞き方を意図的に学習することができる教材です。

話すこと・聞くこと教材『たからものをしょうかいしよう』は、話し手にとっては、話すために構成を考える力（メモを整える力）、それを基に話す力を付けることができる教材です。また、聞き手にとっては、多面的な質問を考えたり、中心を捉えて聞き取ったりしながら意見を言う力を付けることができる教材です。

そこで、本教材は中学年における「話し方・聞き方」の基礎的な力を身に付け、話し合う力を養うためのステップとして適していると考えました。

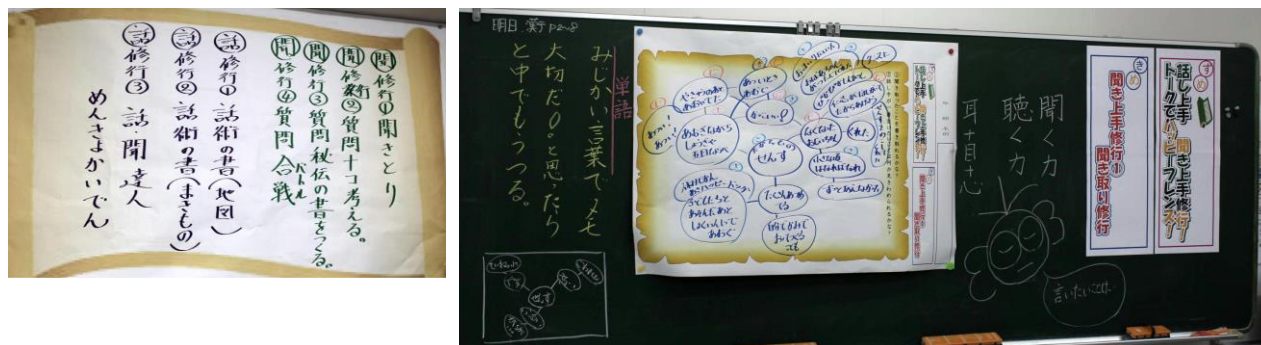
本教材を通して、子供が話すこと・聞くことの基礎的な力を身に付けながら学習を進めていくことができるように、「話し上手・聞き上手修行！『トークでハッピーフレンズ！』」（ハッピーフレンズは学年目標です）を、単元を通して学習していく言語活動として位置付けます。本言語活動は、よりよい話し方・聞き方について子供自ら考えるとともに、身に付けた力を実感しながら学習を進めていく言語活動です。本言語活動において、無理なく資質・能力を育成していくために次のように単元をデザインしました。

教科書の教材を指導する順序を入れ替え、第1次において『気持ちをつたえる話し方・聞き方』を扱い、気持ちが伝わる話し方・聞き方について考える活動を位置付けます。また、話したり聞いたりする力を高めるには、それら以外にも様々な学びが必要であることに気付かせ、単元を通して話し上手、聞き上手になるために、みんなで力を付けていくような学習の見通しをもたせませす。

第2次は、話し方・聞き方を高めるための「話し上手・聞き上手修行！」という言語活動を位置付け、宝物を紹介するために質問力・話す力を鍛えていく学習を行います。

そして、それらの力を活用して、表現する場が第3次となります。ここで身に付けた資質・能力は、国語科だけでなく他の教科・領域などにおける学び合い、発表、話し合いの場などにおいて、「話したり、聞いたり、話し合ったり」するものとして活用できると考えます。

手立て② 全員が楽しく「話す・聞く」授業デザインの工夫（ユニバーサルデザイン）



中学年では、記録したり質問したりしながら聞くことや、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉え、自分の考えをもつことに指導の重点を置いています。聞くことの指導においては、聞いた事柄を基に分からない点や確かめたい点を質問することが重要です。

また、中心を捉えるということは、話し手が伝えたいことの中心を捉えることと、自分が聞きたいことの中心を捉えることという二つの側面をもっています。そのことを全員にしっかり身に付けさせる工夫として、今回の学習では、「自分が聞きたいこと」を質問として表すことを単元の最初の学習とします。

目的を明確にして質問をすることが、自分が話すことを考える際に役立つと考えたからです。話す内容を考えたり、話す練習をするより、自分が知りたいと思ったことを自由に質問する方が、学習に入りやすいと考えました。「先生のペットは猫です。」というと、どの子も「どんな色ですか?」「オスですか?」などの質問をしたいでしょうし、考えることができるのです。

※参考資料：全道国語研究大会において公開した授業の細かな流れを示します。

■本時の流れ（本時案を、より細かく示してみます）

本時の目標

話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことについて質問を考え、質問をクローズドクエッション・オープンクエッションなどの観点ごとに分けるとともに、質問の仕方について考えることができるようにする。

聞き上手修行③～3年1組質問秘伝の書を作ろう！～

○ 前時で行った「質問を10個考えよう」で話し合ったことを基に、質問には、聞きたいことによって種類があることに気づき、質問を考える必要感をもつ。

このぬいぐるみの色は、黄色だね。

このぬいぐるみの名前はぶうさんだね。

くまのプーさんだから、動物の種類は熊だよ。

好き？嫌い？私は好きだな。嫌いな人もいるんだ。

どうして？だってかわいいから…。

まずは、クローズドクエッションとオープンクエッションそれぞれ使うことの良さは何かをつかませます。そうすると、自分の聞きたいことに応じて、質問を考えることで、知りたいことを正確に知ることができることに気づきます。また、スピーチをするときは、クローズドから、オープンへという順序で、スピーチの内容を考えると、伝えたいことがわかりやすく話すことができるということにも気付かせます。

○ 出てきた質問を各グループごとにカテゴライズする。

ぼくは、犬と猫の名前を聞いてそのあと、色とか大きさを聞いたよ。だから、これはすぐ答えられる。

私は、性格やどうして犬と猫を飼おうと思ったのかについて聞いてみたんだ。だから、考える質問。

思い出とかは、は、決まっているものではないから、考える質問じゃないかな？

直前の学習活動でおさえた通りにカテゴライズしていきます。ここまでの子供の質問は圧倒的に、クローズドな質問が多く。オープンへの入り口となる二者択一の質問から、オープンへの発展に気付くことを目的とした学習活動です。

○ グループ間でカテゴライズしたものを交流する。

すぐに答えられる質問の中でも仲間分けできそうだね。

答えが一つの物と、二つから選ぶ物があるよね？オス？メス？とか、好き？嫌い？とか…

考える質問は聞き方が難しいね。二つから選ぶ質問から、考える質問に進む場合もあるし…。

グループ間での交流は、このあと全体交流があるので、やらなくてもよいと思ったのですが、子供の思考を動かしたり、柔軟にしたり、次への学習への意欲をさらに高めるために、取り入れます。他のグループのカテゴライズを見て、自分のグループに帰ったときに、質問を増やしたり、カテゴライズ事態をやり直したりする姿も期待しています。

○ カテゴリー化したものを全体交流し秘伝の書を完成させる。

数とか形とか色とか名前とか、すぐ答えられるよね。すぐ答えられる質問は、種類が限られてくるね。

どんな感じ？とか、例えば？とか、詳しく教えて？とかは、考える質問だね。

そうだね、じゃあ、エピソードとか思い出を聞くとか、どう？

3年1組 質問秘伝の書

~はいつありますか？ どうして~したのですか？
~の色は何色ですか？ ~の思い出を教えてください。
~の形は何ですか？ もっと詳しく教えてください。
~の種類は何ですか？ どこがお気に入りですか？
~は何歳ですか？ エピソードはありますか？

圧倒的に少ない、オープンクエッションの種類を増やしていく活動が主になることと想います。おそらく、クローズドはたくさん出てきます。オープンが少ないので、ほかにどんな質問が考えられるかを、みんなで出し合えれば良いと考えています。

誰にでも答えられる質問と、よく考えて答える質問を分けて、質問の聞き方を秘伝の書にまとめたね。この秘伝の書を使うと質問ができるだけでなく、知りたいことがよくわかるし、スピーチを考えるときに役に立つね。

○ 今日の学習を通して思ったことや考えたことをまとめ、次時の学習の見通しをもつ。

次は、実際に友達にいろいろ質問してみたいな。

秘伝の書ができたから質問しやすいね。

次は、秘伝の書を使いながら宝物を紹介しあったり、質問し合ったりしようね。

☆ 質問力をつける→スピーチ力をつけるという単元構想

本単元では、宝物を紹介し合うために、最終的には、「紹介する」という話す力が身に付くように学習を進めていきました。ですから、通常は、話す力を中心に付けていくというのが、今までの自分の中のセオリーでした。この授業では、まず聞く力を育てることを重視します。聞き取る力だけでなく、質問力を鍛えるのです。質問する内容を考えたり、質問の質（種類）を知ることで、聞き手が何を聞きたいのかがわかってくる…。そうすると、自分がスピーチの内容を考えるときに、聞き手が聞きたいことは何か…ということを考えながらスピーチを考えることができる…。となるのではないかと、ということ考えたことがこの単元構想のスタートとなります。子供たちとも、そのことについて十分話し合っており、「おそらく聞き上手になることは話し上手になることへの近道だよ！」という仮説をお互いが立てた上での授業となりました。この流れは効果的だと考えます。

☆ 話したり聞いたりすることを見える化する

話すこと・聞くことというのは、日常生活では、目に見える言語活動ではありません（「書くこと」「読むこと」に比べると）。つまり、力が身に付いたかどうかを見取る方法も工夫をしなければなりません。自分で実感するのもなかなか難しいですよね。そこで、聞き取ったことをメモしたり、質問内容を整理したり、スピーチを考えたりするのに、思考ツールの整理する手法を示したり、ワークシートを用意したりしました。目に見えない表現を、見えるようにするというのは、当たり前のようにいて、あまり成されていません。ですから、話すこと、聞くことの授業としてとても重要なことであると考えました。

今年度の研究を通して

今年度は、いろいろなヒントをもとに、ユニバーサルデザインの授業を実践してみました。少ししか取り組んでいないのですが、着実に手応えを感じることができるようになってきました。それは、本当に微々たる変化でしかない場合もあります。

例えば、全く手を上げられなかった子が、毎時間うれしそうに笑顔で手を上げるようになったことや、以前は話合いに参加できなかった子が「クライマックスの場面を一つに絞る話合いをもっとしたい！」と授業後に伝えに来たこと、国語嫌いの子が「国語の時間が楽しみになってきた」と言ってくれたり、理由を明確にして話す子が増えてきたり…。楽しい、わかったよ！という子が増えてきたということが、微々たる成果なのではと思っています。

今回一番、感じたのは、できることはとにかくやってみること、それを継続していくこと、積み重ねていくことが、重要であるということです。

もちろん課題は山積みです。(あくまで自分の…)

- 授業の後半、発問が難しくなると手を上げる子が減ってくる。
- 学習環境について、まだまだ手を付けていない。
- 児童の実態把握についてまだまだ十分に見とれていない。
- 3年生の「読むこと」「話すこと・聞くこと」授業でしか実践していないので、他領域、他学年での実践を積んでいきたい。
- まだ勉強をはじめて2ヶ月なので引き続き、様々な実践をしたい。

さて、新学習指導要領には、次のように書かれています。

○ 障害のある児童への配慮についての事項

(9) 障害のある児童などについては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと。

※ 通常の学級においても、発達障害を含む障害のある児童が在籍している可能性があることを前提に、全ての教科等において、一人一人の教育的ニーズに応じたきめ細かな指導や支援ができるよう、障害種別の指導の工夫のみならず、各教科等の学びの過程において考えられる困難さに対する指導の工夫の意図、手立てを明確にすることが重要である。これを踏まえ、今回の改訂では、障害のある児童などの指導に当たっては、個々の児童によって、見えにくさ、聞こえにくさ、道具の操作の困難さ、移動上の制約、健康面や安全面での制約、発音のしにくさ、心理的な不安定、人間関係形成の困難さ、読み書きや計算等の困難さ、注意の集中を持続することが苦手であることなど、学習活動を行う場合に生じる困難さが異なることに留意し、個々の児童の困難さに応じた指導内容や指導方法を工夫すること

例えば、国語科における配慮として、次のようなものが考えられる。

- ・文章を目で追いながら音読することが困難な場合には、自分がどこを読むのかが分かるように教科書の文を指等で押さえながら読むよう促すこと、行間を空けるために拡大コピーをしたものを用意すること、語のまとまりや区切りが分かるように分かち書きされたものを用意すること、読む部分だけが見える自助具（スリット等）を活用することなどの配慮をする。
- ・自分の立場以外の視点で考えたり他者の感情を理解したりするのが困難な場合には、児童の日常生活経験に関する例文を示し、行動や会話文に気持ちが込められていることに気付かせたり、気持ちの移り変わりが分かる文章の中のキーワードを示したり、気持ちの変化を図や矢印などで視覚的に分かるように示してから言葉で表現させたりするなどの配慮をする。
- ・声を出して発表することに困難がある場合や、人前で話すことへの不安を抱いている場合には、紙やホワイトボードに書いたものを提示したり、ICT機器を活用して発表したりするなど、多様な表現方法が選択できるように工夫し、自分の考えを表すことに対する自信がもてるような配慮をする。

主体的で対話的で深い学びのある授業を全員に実現することの重要性も重視しています。（当たり前のことではありますが…）一層の努力は必要となります。

最後に、国語科のことについて考えたことを、掲載いたします。

○ 国語科の学びによって児童に身に付く力

- ① 話す・聞く・書く・読むなど日常生活において適切に使う言葉の力
→もちろん、適切に使うためには、特質を理解したり、語彙を獲得していなければならない…
- ② 人との関わりの中で言葉などを使って想いや考えを伝え合う力
→思考や想像・判断なども頭の中で言葉を使って行っていることが多いため、言葉を学ぶことは、思考力・判断力・表現力をさらに向上させる。
- ③ 言葉の大切さを自覚したり、言葉を大切に作る心、そして言語感覚
- ④ 個人的には、ユーモアや生活を楽しむ力も言葉によるものだ…。

○ 国語科の学習はどのようにあるべきか

- ① 話すこと・聞くこと・書くこと・読むことのスルをしっかりと身に付ける授業の展開
- ② コミュニケーションの基礎となる言葉の力をはぐくむ言語活動の創意工夫
- ③ 語彙指導・漢字指導の充実を図る授業開発
- ④ 情報を適切に理解し、情報を取り出したり整理したり、関係を捉えて活用する言語活動の創意工夫
- ⑤ 言葉で考え、表現する授業になるような言語活動の創意工夫
- ⑥ 言語文化、書写、読書などの指導の充実

○ 成果ある学びを目指す具体的授業像

- ① 話す力を身に付けるための「聞く力・質問力」を高める学習展開
→質問するポイントや自分が知りたいことを質問する力が身に付くと、それを基に自分が発表したり、話したりするときに、構成を考えやすい。つまり、聞く力を付けてから話す力を付ける単元構

想の方が効果的かもしれない…と最近考えています。

② 書く力を高める実践的な学習展開

→ただの作文指導では、実践的な書く力は付けられないようです。話すために書く原稿を作る。聞き取るときに中心をメモする。情報を取り出して書きまとめる。考えを整理するために書き殴る。引用して考えたことを書く。実際に依頼文を作ったり、感謝状を書く。などなど、様々な言語活動を考える際に、書くという言語活動は、話したり聞いたり読んだりしたと連動している必要があると思います。

→筆記具を選んで手紙を書くとか、ラブレター（愛する人だけではなくペットや宝物への手紙でもいい）を書く、脚本を書くなんていう言語活動ももしかすると、言葉を大切に書く手立てとしていいかもしれません。私が行った実践で、大喜利の脚本を書くという授業を行いました。実にユーモアの効いた楽しい単元となりました。言語感覚を養うことにもつながったと思います。

③ 読書離れを防ぐ、「読書会」などの授業開発

→文学的・説明的文章を問わず、読んだ文章について考えたことや思ったことを話し合う、読書会的な学習活動は、子供が読書に親しむために大変有効だと考えます。読書会で話し合われた内容や自分が考えたことは、実は読書感想文に転用することで優れた読書感想文ができあがりたりもします。いずれにしても読書の充実を謳っている以上、読書に親しむ学習が不可欠だと考えます。

④ 反復やつらい学習も必要！！！！

→漢字を覚えたり、言葉を使えるようにするには、ただ楽しいだけでは達成できないと思っています。もちろん楽しく学べるような工夫は必須ですが、反復練習やいやだなあと思うような覚える学習、暗唱なども取り入れていく必要はあると考えます。

4. 国語科研究の推進と取り組みを進めたい内容

① 国語科は、言葉で考え、言葉で表現する教科なので、子供の身に付けた力を適切に見取る必要があります。そして、子供の様子を把握し、適切に支援をする、支援と評価の一体化（昔から言われている）を改めてしっかり行う必要があります。

② 言語活動の充実が叫ばれて久しいですが、やはり各教科において思考力・判断力・表現力をはぐくむに当たって言語活動を通すことは不可欠ですから、より実践に根ざした言語活動を開発して、言語活動を行いながら、言葉の資質能力を身に付けたり、その言語活動を行うことができるような資質・能力を身に付けさせることが大事だと思います。

③ そう考えると、各教科と関連した国語科の年間計画の作成も必要です。
大きな言語活動を資質・能力を身に付けながら学習していく単元デザイン
そのための小さな資質・能力を身に付ける各1単位時間の授業デザイン
そして、確実に力を身に付けることができるように支援するための評価

という大きな3つのことを研究していくつもりです。